Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Sport Policy for Japan 2016
報 告 書

主 催： Sport Policy for Japan
公益財団法人 笹川スポーツ財団
明治大学 政治経済学部（会場協力）

後 援： スポーツ庁
公益財団法人 日本オリンピック委員会
公益財団法人 日本体育協会

目　次

Sport Policy for Japan 2016　代表幹事 挨拶 …… 1

Sport Policy for Japan 2016　開会にあたり …… 1

Sport Policy for Japan 2016　大会概要 …… 2

審査員 …… 2

当日のプログラム …… 2

大会総括 …… 3

幹事会メンバー一覧 …… 4

指導教員一覧 …… 6

記念講演 …… 7

研究タイトル一覧 …… 10

Sport Policy for Japan 2016　当日の様子 …… 12

Sport Policy for Japan 2016　受賞チーム …… 14

受賞チーム要旨…… 22

Sport Policy for Japan 2016 代表幹事 挨拶

中園 友輔　早稲田大学 スポーツ科学部 間野研究室

今回、史上最多となる20大学53チームが参加したSport Policy for Japan 2016の代表幹事を務めさせていただきました。大会を運営する幹事会メンバーの皆様と笹川スポーツ財団様のご協力により大会を成功させることができました。50人を超えるメンバーをまとめあげ大会成功に導くという、大変貴重な経験をさせていただきましたことに、心より感謝いたします。

事前準備から会の進行まで、全体を通してメンバー同士が助け合って進められた点が良かったと思います。一方で、審査方法など改善すべき点もいくつか挙げられました。また、学生同士の横のつながりだけでなく、社会人の方々との縦のつながりも強化していければ、SPJがより良い成長の場になるのではないでしょうか。今回見えてきた、良い点や課題点を来年のメンバーにもしっかり共有し、次につなげてほしいと思います。

代表幹事個人として振り返ると、「反省」という言葉しか思い浮かばず、これほどまでに自分の無力さを経験したのは久しぶりのことでした。しかし、仲間とともにイベント運営をやりきったことは、将来に必ず活かせると感じています。大変良い経験となりました。本当にありがとうございました。

Sport Policy for Japan 2016 開会にあたり

小野 清子　公益財団法人 笹川スポーツ財団 理事長

このたび、Sport Policy for Japan 2016が、皆様方のご協力のおかげをもちまして、盛会に開催されました事、厚く御礼申し上げます。

当財団は、日本のスポーツの将来を担う次世代の人材を育成するため、2011年より本事業を始めました。今回の開催にあたり、20大学約300名の大学生にご参加いただいたことを、大変嬉しく思っております。ご自身の研究活動と並行して、6月から大会の準備をしてこられた幹事会の皆様、本当にご苦労様でした。大学の枠を超えて、同じ問題意識を持ったこの仲間をぜひ大切にしてください。

スポーツを取り巻く環境は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを4年後に控えて大きく変化しています。そうした変化に対して、スポーツ界の将来を担う若い世代の積極的な発言が求められます。今回、皆様が発表されたスポーツ政策・スポーツ環境の課題への提言のように、今後も情熱をもって日本のスポーツのあり方に対して発言していただきたいと思います。

おわりに、会場をご提供いただいた明治大学ご関係者の皆様、参加学生をご指導くださいました教員の皆様、ならびに多大なご支援を賜りましたすべての関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

誠に有難うございました。

■ Sport Policy for Japan 2016　大会概要■

日　　時：2016 年 10 月 29 日（土）10：30 ～ 17：15
　　10 月 30 日（日）10：00 ～ 16：30
会　　場：明治大学　駿河台キャンパス
　　東京都千代田区神田駿河台１－１
参加大学：20 大学　53 チーム　291 名
　　江戸川大学、桜美林大学、大阪経済大学、大阪体育大学、神奈川大学、金沢星稜大学
　　札幌大学、産業能率大学、順天堂大学、太成学院大学、帝京大学、桐蔭横浜大学
　　東海大学、同志社大学、東北学院大学、一橋大学、北翔大学、明治大学、
　　立教大学、早稲田大学　（五十音順）
主　　催：Sport Policy for Japan
　　公益財団法人 笹川スポーツ財団
　　明治大学政治経済学部（会場協力）
後　　援：スポーツ庁
　　公益財団法人 日本オリンピック委員会
　　公益財団法人 日本体育協会

■審査員■

井上 俊也 氏（大妻女子大学 教授）
佐野 毅彦 氏（慶應義塾大学大学院 准教授）
松澤 淳子 氏（早稲田大学 招聘研究員）
福田 拓哉 氏（新潟経営大学 准教授）
涌田 龍治 氏（京都産業大学 准教授）
渡邉　徹 氏（川村学園女子大学 講師）
猪股 康博 氏（スポーツ庁 国際課 課長補佐）
熊谷　哲 氏（PHP 総研 主席研究員）
玉木 正之 氏（スポーツライター）
澁谷 茂樹（笹川スポーツ財団　スポーツ政策研究所主任研究員）
吉田 智彦（　　同　　副主任研究員）
藤原 直幸（　　同　　研究員）
小淵 和也（　　同　　研究員）
山田 大輔（　　同　　研究員）
上　　梓（　　同　　研究員）

■当日のプログラム■

10 月 29 日	1．開会式	10：30 ～ 10：50
（1 日目）	2．政策提言発表	11：10 ～ 17：15
10 月 30 日	1．記念講演　参議院議員　朝日健太郎氏	10：00 ～ 10：40
（2 日目）	2．政策提言発表 決勝プレゼン	11：00 ～ 15：10
	3．表彰式・閉会式	16：00 ～ 16：30

大会総括

公益財団法人 笹川スポーツ財団 専務理事　渡邉 一利

参加学生、指導教員、そして外部審査員。さらには会場をご提供いただいた明治大学。そして我が笹川スポーツ財団のスタッフ。関係者全ての良きチームワークにより、「Sport Policy for Japan 2016」を無事に開催することができました。この場をお借りして、皆様に厚く御礼申し上げます。なかでも、大学の垣根を越えて共同作業に尽力し、大会成功の原動力となった幹事会メンバーの皆さん、心より敬意を表します。

皆様のお力添えにより年々参加チームが増え、発表内容も多岐に亘るようになりました。

６回目を迎えた今大会には、金沢星稜大学、太成学院大学、北翔大学が新たにエントリーされ、昨年より 14 チーム増えた 53 チーム、291 名が熱い議論を展開しました。

「参加チームの一人ひとりが一生懸命に考え、準備し、当日のプレゼンテーションを迎える。」「聴講する他大学の学生からの質問に懸命に答える。」

一つひとつのシーンが参加学生の達成感と今後の自信につながれば、と毎回同じように祈ることだけが、唯一私の役割であります。

今大会は、立教大学松尾ゼミナールＢ班「特別支援学校におけるスポーツ活動の定着促進～スポーツを身近な存在へ～」が最優秀賞に輝きました。運動・スポーツに触れる機会が少ない障害者に対して提案された定期的な運動・スポーツ支援プログラム「はじめの IPPO プロジェクト」は、定量・定性の調査が十分かつ的確に行われており、合理的な内容に良くまとめられていたと思います。

残念ながら各賞の選には漏れたものの、我が国のスポーツが抱える課題・問題点に対し、興味深い提言につなげている発表も数多くみられました。達成感や満足感を得られたチームばかりではないかもしれませんが、参加した一人ひとりが、多くの気づき・学びを得たことと思います。

なお、プレゼンテーション技術の向上には、目を見張るものがありました。指導教員のご尽力により、回を重ねるごとに着実にレベルアップしていると思います。

日本のスポーツ推進を担う人材育成は、当財団の重要業務のひとつです。「Sport Policy for Japan 2016」に参加された学生の皆様が、この大会を契機に、日本の未来に思いを馳せ、社会経済情勢に気を配り、スポーツが日本の未来づくりにどう貢献するのか、どのような政策が求められるのか、日常的に考える癖をつけていただければ幸いです。そして、いつの日かその思いが行動に結びつき、日本のスポーツを推進する役割を果たしていただけるのであれば、それは望外の喜びとなるでしょう。

最後に、参加学生をご指導されました担当教員の皆様、外部審査員の皆様、また会場をご提供いただきました明治大学の皆様、そして、ご講演いただきました参議院議員　朝日健太郎様にあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

■幹事会メンバー一覧■

代表幹事

氏　名	所　属	
中園友輔	早稲田大学	スポーツ科学部

副代表幹事

氏　名	所　属		担　当
鳥越慎平	早稲田大学	スポーツ科学部	運営担当
中尾彩夢	立教大学	コミュニティ福祉学部	広報担当
中野渡航輝	桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部	運営担当
成澤綺世香	尚美学園大学	総合政策学部	製作物担当
和田征大	帝京大学	経済学部	広報担当

幹　事

氏　名	所　属		担　当
赤塩和哉	神奈川大学	人間科学部	運営班
石川真実	順天堂大学	スポーツ健康科学部	運営班
稲澤龍馬	桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部	運営班
江端郁弥	札幌大学	文化学部	運営班
小倉唯	大阪経済大学	人間科学部	運営班
小山汐理	桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部	運営班
角田祐樹	北翔大学	生涯スポーツ学部	運営班
梶原悠矢	大阪経済大学	人間科学部	運営班
金子美穂	東海大学	体育学部	製作物班
川合茉実	明治大学	政治経済学部	運営班
神崎里奈	帝京大学	医療技術学部	製作物班
栗原数理	神奈川大学	人間科学部	広報班
後藤和樹	立教大学	コミュニティ福祉学部	製作物班
小林巧典	大阪経済大学	人間科学部	運営班
齋藤愛	東海大学	体育学部	運営班
佐藤真輔	金沢星稜大学	人間科学部	運営班
椎葉凌	江戸川大学	社会学部	運営班
庄司健人	東北学院大学	教養学部	運営班
白田直人	江戸川大学	社会学部	広報班
園部準	明治大学	政治経済学部	運営班
高橋正和	大阪経済大学	人間科学部	運営班
田代恭次	帝京大学	経済学部	広報班

氏　名	所　属		担　当
田中喜規	一橋大学	商学部	運営班
田村瑚子	帝京大学	経済学部	広報班
田村大地	東海大学	体育学部	運営班
出口知弘	同志社大学	スポーツ健康科学部	運営班
鳥山　稔	金沢星稜大学	人間科学部	運営班
中垣路子	県立広島大学	経営情報学部	運営班
中里和徳	桜美林大学	健康福祉学群	広報班
永野義和	大阪経済大学	人間科学部	運営班
中村貴大	帝京大学	医療技術学部	運営班
七山諒太郎	明治大学	政治経済学部	運営班
生川晴菜	大阪体育大学	体育学部	運営班
西翔太朗	太成学院大学	人間学部	運営班
西田瑛人	大阪体育大学	体育学部	運営班
沼田夢菜	金沢星稜大学	人間科学部	運営班
野村恭平	同志社大学	スポーツ健康科学部	運営班
藤井彩乃	明治大学	政治経済学部	運営班
藤田健太郎	一橋大学	商学部	製作物班
本間銀次郎	順天堂大学	スポーツ健康科学部	運営班
松本雄也	札幌大学	文化学部	運営班
宮﨑亜美	立教大学	コミュニティ福祉学部	広報班
村田善之介	大阪学院大学	経済学部	運営班
村山芽衣	大阪体育大学	体育学部	運営班
面来優希	札幌大学	文化学部	運営班
森　夏美	帝京大学	経済学部	広報班
山家大輝	太成学院大学	人間学部	運営班
山本裕也	大阪経済大学	人間科学部	運営班
鑓　健佑	同志社大学	スポーツ健康科学部	運営班
結城彩花	神奈川大学	人間科学部	広報班
弓削田崇史	帝京大学	医療技術学部	運営班
吉田　晶	産業能率大学	情報マネジメント学部	広報班
芳野修造	大阪体育大学	体育学部	運営班

■指導教員一覧■

氏　名	所　属	
相原正道	大阪経済大学	人間科学部
天野和彦	東北学院大学	教養学部
石井十郎	帝京大学	医療技術学部
江頭満正	尚美学園大学	総合政策学部
大竹弘和	神奈川大学	人間科学部
大津克哉	東海大学	体育学部
大山　高	帝京大学	経済学部
岡本純也	一橋大学	商学部
小野田哲弥	産業能率大学	情報マネジメント学部
片上千恵	帝京大学	経済学部
工藤康宏	順天堂大学	スポーツ健康科学部
後藤光将	明治大学	政治経済学部
小林　至	江戸川大学	社会学部
佐々木達也	金沢星稜大学	人間科学部
澤井和彦	桜美林大学	健康福祉学群
渋倉崇行	桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部
庄子博人	同志社大学	スポーツ健康科学部
高峰　修	明治大学	政治経済学部
田島良輝	大阪経済大学	人間科学部
田中宏和	桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部
千葉直樹	北翔大学	生涯スポーツ学部
東原文郎	札幌大学	スポーツ文化専攻
冨山浩三	大阪体育大学	体育学部
中山　健	大阪体育大学	体育学部
萩裕美子	東海大学	体育学部
長谷川健司	太成学院大学	人間学部
松尾哲矢	立教大学	コミュニティ福祉学部
松野光範	大阪学院大学	経済学部
間野義之	早稲田大学	スポーツ科学学術院
武藤泰明	早稲田大学	スポーツ科学学術院
和田　崇	県立広島大学	経営情報学部

記念講演

参議院議員　朝日 健太郎 氏

■キャリアの話「柔軟に、覚悟を決めて全力で取り組む！」

今日、若い学生の皆さんにお話ししたいのは、主に3つのテーマについてです。まずはキャリアの話です。

私は中学校でバレーボールを始めて、26歳でビーチバレーに転向しました。バレーボールでは日本代表選手として活躍していましたが、やがて日本のバレーボール界で活動していくことに窮屈さを感じるようになりました。そこで、もっと競技者として自分を高めたい、世界にチャレンジしたいと考え、未開拓のビーチバレーにチャレンジしたいと思うようになりました。

今でこそビーチバレーの認知度は上がりましたが、2002年当時はまだあまり知られていませんでした。転向すると言ったら、両親にも、所属企業にも、高校や大学の恩師にも反対されました。私の行動がわがままに映ったのは仕方がありませんが、それでも私はビーチバレーに転向しました。

ビーチバレーを11年続けてよかったことは、自分の考え方をしっかりと整理できたこと、自分という競技者がどうやって世の中で戦っていけばいいのか、ということを自分なりに理解できたことです。

バレーボール選手であった頃は、時間になれば食事が出てきたり、お迎えの車が来たり、自分が何もしないでも試合は始まり、気が付けばユニフォームは洗濯して用意されていました。そうやって自己管理という感覚がどんどん無くなっていきました。よくいえば競技に集中できますが、競技以外のことは何もしなくなっていきます。バレーボールの世界にいて、何か視野が狭くなっていっているような気がしました。

ビーチバレーに転向してからは、地下鉄の切符も自分で買うし、移動にタクシーや貸し切りのバスがあてがわれることはありません。どのようなトレーニングをするのか、どのような食事を取るのか自分で決めなければいけません。いろんな意味でいい経験となりました。そういった積み重ねによって、国際感覚や勝負勘が養われたと思っています。結果的にオリンピックに2度出場できました。

2012年の2度目のオリンピックを経て、現役を引退しました。せっかくビーチバレーで世界を回ってきたので、日本の海辺の資源をもっと有効活用できるような人材になりたいと思うようになりました。指導者という立場ではなく、ビーチバレーの競技人口の増加や市場規模が大きくなるような取り組みを行ったり、海辺の活性化という活動を行いました。そういった活動を4年して、この夏から国会議員としてのキャリアをスタートさせました。

自分のキャリアを振り返ると、節目ごとに考え方は変わっていったと思いますが、前例がないもの、ストーリーがまだ見えていないものにチャレンジしたいという気持ちは変わらずに持っていたように思います。

みなさんのような学生世代をキャリアの第一歩目と考えるなら、まずは先人たちの生き方を参考にするのが一番かなと思います。そこから、みなさんだけのストーリーを作っていってほしいと思います。

■日本のスポーツ業界は可能性だらけ、チャンスをつかめ！

次に、日本のスポーツ業界をテーマにお話します。日本はリオデジャネイロオリンピックで41個のメダルを獲得しました。メダル獲得数は大会ごとに伸びています。なぜ競技力が上がっているのか。簡単に言えば、競技力強化に投入される国のお金が増えているからです。競技団体に回るお金が増えて、海外遠征ができたり、練習環境が良くなったりする。質の高い指導が受けられるようになります。

スポーツ庁の鈴木大地長官は、さらに競技力を上げるためにいろいろなプランを考えています。たとえば競技転向というアイデアがあります。野球が例にあげられます。競技人口が多く、競争の激しい野球では、能力の高い選手たちが試合に出られず、スタンドで応援しています。こうした選手に他競技に転向してもらい、活躍してもらおうというものです。

日本は同じ競技をずっと一筋にやるのが美徳とされていますが、アメリカでは高校時代に3、4競技やるのは当たり前です。競争の激しいメジャースポーツで埋もれてしまいそうな人材を競技転向させ、力を発揮させるという試みは、とても面白いと感じています。

しかし、オリンピックでのメダル獲得総数が増えている一方で、日本のスポーツ産業は縮小しています。スポーツ産業とはテレビ放映権、物販、チケットの販売など、スポーツに関わるすべてのサービスの売上げを指します。国では現在の市場規模5.5兆円を2020年までに10兆円、25年までに15兆円にしようと考えています。

そこに皆さんが活躍するチャンスがあると思います。90年代後半、アメリカのスポーツ産業の市場規模は18兆円、日本が6兆円くらいでした。ここからアメリカは伸びて60兆円となり、2010年にスポーツ産業が自動車産業を上回りました。こういった世界の流れがある中で、日本は後れを取ってしまっているのです。

スポーツ産業というお金に関わるところを成長させると、競技力の向上にもつながります。テレビ放映権だけでなく、教育関係、高齢者の健康、障害者支援など、スポーツに関連するあらゆる産業を成長させるべく、皆さんに活躍してもらいたいと考えています。

■一緒に東京オリンピックを成功させよう！

最後のテーマは2020年の東京オリンピック・パラリンピックをいかにして成功させるかです。競技施設の在り方が問題になっていますが、リオデジャネイロ大会を視察して感じたのは、必ずしも完璧な競技施設ではなくてもオリンピックはできるということです。リオの施設は完璧ではありません

でしたが、お客さんは気にしないし、結果として日本選手団は過去最多のメダルを獲得しました。

「アスリートファースト」という言葉がもてはやされています。アスリートが最高の状態で競技できるように環境を整えるという意味ですが、私はリオでオリンピックの成功は多くのお客さんがいないと達成できなかったと強く実感しました。どんなに素晴らしいパフォーマンスをしても、どんなにすごい世界記録を出しても、そこに熱狂するお客さんがいなければ、オリンピックの成功はありません。大事なのは施設ではないのです。その空間に熱狂が重なり合い、世界中の人たちが一体感に包まれて、初めてオリンピックは成功するのです。アスリートファーストも大事ですが、いわば「オーディエンスファースト」という視点が非常に重要になってくると思います。

選手が発揮した価値をどれだけ多くの人が享受できるのか。ここをよく考える必要があります。最高のパフォーマンスをすれば、お客さんが勝手に集まり、チケットを買ってくれる。そう思うのは大きな間違いではないでしょうか。

「おもてなし」という言葉も独り歩きしているところがあって、世界の人たちが日本特有の十分なサービスに満足してくれるという前提でものを考えると、大きな間違いを犯す危険性があります。日本のスタンダードと世界のスタンダードは違うという現実を認識しなければなりません。

皆さんが今後どのようなキャリアを積んでいくにしても、様々な視点、考え方があるということを忘れずにいることが大事だと思います。そのような考えを持ちながら、2020 年が大きなチャンスだということを踏まえて、それぞれの道を歩んでほしいと考えています。

■研究タイトル一覧■

江戸川大学　小林ゼミ A
～廃校施設を障害者スポーツ施設に～

江戸川大学　チームオガスティ V2
～今だから見直せ！少年サッカー教育～

桜美林大学　澤井ゼミ
プロ野球選手のキャリアトランジションに関する研究

大阪経済大学　相原ゼミ A チーム
「長居障がい者スポーツセンター」におけるイベント告知方法に関するご提案

大阪経済大学　相原ゼミ B
舞洲スポーツアイランド活性化についての提言　～人工島からスポーツアイランドへ～

大阪経済大学　相原ゼミするスポーツチーム
大阪府の運動実施率向上策　～健康でお得！！～

大阪経済大学　田島ゼミナール 1 班
スポーツツーリズムを通したまちづくり　～ Surfing × Health ～

大阪経済大学　田島ゼミ 2
スポーツで人々を巻き込もう　～スポーツ実施率向上に向けて～

大阪経済大学　田島ゼミ 3
2020 東京オリンピックのキャンプ地を活用した地方創成　～「野球」のまち 徳島阿南市を事例にして～

大阪体育大学　冨山ゼミ A
子供の運動離れ解消計画　～なんでもスポーツマンション～

大阪体育大学　冨山ゼミ B
ヲタスポ　JAPAN

大阪体育大学　中山ゼミ　アスリート研究班
e-learning を用いたトップアスリートの倫理教育

大阪体育大学　中山ゼミ　親子スポーツ研究班
親子でのスポーツ機会の創出

神奈川大学　大竹ゼミナール　チーム J
働く女性にスポーツの機会を

神奈川大学　大竹ゼミナール　チーム P
障害者スポーツの観戦者拡大に向けて

神奈川大学　大竹ゼミ　チーム S
若い女性のスポーツ実施率向上を目指して

金沢星稜大学　佐々木ゼミナール A
地区予選敗退のスポーツチームを強化するための提言　― 組織風土の観点から ―

金沢星稜大学　佐々木ゼミナール B
漸進性の魅力と公民館の活用によるマラソン振興の研究

札幌大学　東原ゼミ A 班
より公正なオリンピック・パラリンピック招致プロセスの提案

札幌大学　東原ゼミ B 班
札幌市小学校のスキー学習の環境改善　～将来のスノースポーツ増加を目指して～

札幌大学　東原ゼミ C 班
震災復興とスポーツ　～風化させないためにできること ～

産業能率大学　小野田哲弥ゼミ
#（ハッシュタグ）を応用したロングテールの活性化

順天堂大学　工藤ゼミナール A
障がい者スポーツ普及にむけて　～体育教育現場の観点から～

順天堂大学　工藤ゼミナール B
プロスポーツ選手のセカンドキャリアについて　―コミュニティカレッジを参考にした教育改革―

尚美学園大学　江頭ゼミ
障害者スポーツの社会進出

太成学院大学　長谷川ゼミ 1
プロスポーツクラブの未来

太成学院大学　長谷川ゼミ 2
女子スポーツの普及と発展　～女子野球に着目して～

帝京大学　石井ゼミ　チーム A
障害者スポーツの発展に向けて　～実施率上昇のために～

帝京大学　大山ゼミナール A
「J リーグクラブ × 大学」パートナーシップの現状

帝京大学　大山ゼミナール B チーム
大学スポーツ × 大学卒業生ネットワークを活用する大学スポーツクラブの設立について　―帝京大学および周辺地域を事例に―

帝京大学　大山ゼミナール C
見せましょう、産官学連携の力を　―スポーツ社会の明るい未来創造を目指して―

帝京大学　片上ゼミ
ブラインドサッカー集客数向上のための施策　～ダイバーシティ推進を目指して～

桐蔭横浜大学　渋倉ゼミ A チーム
スポーツ推進委員の効果的な活動方法を巡って

桐蔭横浜大学　渋倉ゼミ B チーム
運動部活動顧問の負担軽減

桐蔭横浜大学　田中ゼミ
＃マイナースポーツ＃拡散希望　―アルティメットを事例として―

東海大学　大津ゼミ
環境対策を通じた健康促進プロジェクト　～スポーツ・レジャーを踏まえた取り組み～

東海大学　萩ゼミ A チーム
SPORT FOR TOMORROW と日本のスポーツ振興

東海大学　萩ゼミ B
中学生のための部活動改革　―好きなスポーツをするために―

同志社大学　スポーツビジネス A チーム
車椅子バスケットボールリーグ化構想

同志社大学　スポーツビジネス B チーム
日本におけるサイクリングの可能性

同志社大学　スポーツビジネス C
大学スポーツ施設の未来　～「観る」施設へ～

東北学院大学　スポーツマネジメント研究室
大規模噴火災害とスポーツ　―安全な登山活動を目指して―

一橋大学　岡本ゼミチーム A
子どもの遊びに“冒険”を

一橋大学　岡本ゼミ　B チーム
Walrism　～歩く（walk）× 観光（tourism）～

北翔大学　千葉ゼミ
障がい者スポーツの推進

明治大学　後藤光将ゼミ A
子どものスポーツ大改造計画　～青少年期の複数スポーツへの取組の促進と定着～

明治大学　後藤ゼミ B
オリンピック・パラリンピック教育が抱える課題　～オリンピズムの理念の普及について～

明治大学　後藤ゼミナール　チーム C
子供の運動不足をラジオ体操で解消しよう

明治大学　高峰ゼミナール
ボールで遊べる公園づくり

立教大学　松尾ゼミ A
子ども園 After School Project

立教大学　松尾ゼミナール B 班
特別支援学校におけるスポーツ活動の定着促進　～スポーツを身近な存在へ～

立教大学　松尾ゼミ C グループ
「女性スポーツ」改革プロジェクト

早稲田大学　間野研究室
アスリートの現役中におけるキャリア形成支援に関する調査

早稲田大学　武藤ゼミ
e-sports を小学校の必修に ―スポーツが健康や生活の質を高める社会になるために―

Sport Policy for Japan 2016　当日の様子

開会式

2016年10月29日（土）

分科会

2016年10月29日（土）

記念講演

2016年10月30日（日）

決勝プレゼンテーション

2016年10月30日（日）

Sport Policy for Japan 2016 最優秀賞

立教大学
松尾ゼミナール B 班

特別支援学校における
スポーツ活動の定着促進
～スポーツを身近な存在へ～

受賞コメント

丸茂 建太

この度は最優秀賞をいただくことができ大変光栄に思っております。松尾ゼミ全員で創り上げた成果を皆様の前で発表できたことが何よりも嬉しかったです。そのような貴重な場を尽力して作ってくださった幹事会の皆様、笹川スポーツ財団の皆様、審査員の皆様に厚くお礼申し上げます。皆様のおかげで貴重な体験をさせていただくと共に、大変多くのことを学ばせていただきました。これからは教えていただいたことを糧にし、日々精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

中尾 彩夢

半年間６人で必死に取り組んできた研究の成果を悔いなく発表できたこと、そして最優秀賞という形で評価をしていただけた事を大変嬉しく思っております。途中で何度も壁にあたりましたがこの大会を通じて、全員で同じ目標に向かって頑張ることの素晴らしさや自分たちの思いを多くの人に伝えることの難しさなどたくさんの事を学ばせていただきました。お忙しい中熱心にご指導いただいた松尾先生、院生・四年生の先輩方に感謝の気持ちでいっぱいです。また、今大会の運営にご尽力くださった笹川スポーツ財団様をはじめとする関係者の皆様にも深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

秋山 奈穂

この度は最優秀賞を頂くことができ、大変嬉しく思っております。このような素晴らしい賞をいただけたのもお忙しい中ご指導してくださった松尾先生、院生の方々、先輩方、高めあいながら励んできた松尾ゼミ同期の皆、そして試行錯誤を繰り返し最後まで共に研究をしてきたメンバーのおかげだと感じております。今大会を通して私自身新たな発見が多くあり、非常に貴重な経験をすることができました。最後に、大会運営にご尽力くださった笹川スポーツ財団様、審査員の皆様、幹事会の皆様、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

坂本　航

この度は栄誉ある Sport Policy for Japan にて最優秀賞を受賞でき、大変光栄に思っております。この賞をいただけたのも、多忙な中私たちに尽力をしてくださった松尾先生、院生をはじめとした先輩方、また本番の運営をしてくださったSPJ 運営幹事や審査員の方々、そして共に競い合ったゼミ生同期と他大学の学生たちのおかげであると思っております。心から感謝しております。今後も現状に満足せず、さらなる飛躍を目指し精進していきたいと思います。

小檜山 匠

この度は最優秀賞をいただくことができ、大変光栄に思っております。この賞を取ることができたのは半年間共に研究してきた５人はもちろん、松尾先生のご指導、院生の方々、OBOG の先輩方、松尾ゼミナール生のご協力があったからこそだと強く感じております。この SPJ を通して私自身成長することができ、忘れることのない経験となりました。最後に今大会の運営にあたりご尽力してくださいました笹川スポーツ財団様、審査員の皆様、幹事会の皆様、関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

外岡 里佳子

この度は最優秀という光栄な賞をいただき大変嬉しく思います。私は本大会を通してチームで一つの研究を進めることの難しさや成し遂げた時の達成感を知りました。これらの学びは、的確なアドバイスをくださる松尾ゼミの院生の方々や四年生の先輩方、共に研究に励んだ同期、あたたかいご指導下さった松尾先生のサポートがあり得られたものです。そして本大会を支えていただいた笹川スポーツ財団様、審査員の皆様、幹部の方々をはじめとする全ての方々に心から感謝申し上げます。

Sport Policy for Japan 2016 優秀賞

一橋大学
岡本ゼミチーム A

子どもの遊びに“冒険”を

受賞コメント

岩渕 智史

この度SPJで優秀賞を受賞させていただいたことを誠に光栄に思っております。まさか賞を受賞できるとは思ってもいなかったので、驚きましたが、チーム全員の努力、そして研究に携わっていただいた方々の協力が実った結果だと思います。SPJに向けての研究を通して、学べたことは今後にも活かされてくると感じています。最後にゼミ生、教授、協力してくださった方に感謝させていただいて受賞のコメントとします。ありがとうございました。

高橋 渓一郎

この度は、SPJにおきまして優秀賞を頂くことが出来、大変嬉しく、また、光栄に思っております。 一つの目標に対して徒党を組み、各々が個人の得意分野の役割を分担をし、完成に近づけるという行いは、私自身の大学生活の中でも特に新鮮で価値あるものとなりました。
そして、この経験は将来的に社会に出るにあたって、非常に糧となる行動であったと終わった今、実感しております。 このような経験を与えてくださったSPJの関係者の皆様、そして、研究にご協力頂いたインタビュー先の皆様、色々とご助言頂いたゼミの皆様、本当にありがとうございました。

田中 喜規

この度は、優秀賞を頂き光栄に思います。賞を頂けると思っていなかったので、これまでの取り組みに対して評価して頂き、大変嬉しく思います。
SPJに向けた取り組みで、チームビルディングや議論を組み立てる難しさを痛感させられました。これを乗り越えたことで、人間として一皮剥けたと思います。
こうした学びの場を提供して下さった笹川スポーツ財団の関係者の皆様、我々の研究に協力して下さった関連団体の皆様、岡本先生や先輩方、本当にありがとうございました。

武藤 光平

今回Sport Policy for Japan2016優秀賞を受賞することができ、大変光栄に思います。この大会での提言に向けたチームでの取り組みを通じて、政策を作り上げる一連の過程の難しさなど、多くのことを学ぶことができ、自分にとって大変貴重な経験となりました。ここで得た学びを活かして今後の活動にも励んでいきたいです。最後に、研究に協力してくださったインタビュー先の方々、岡本先生をはじめとするゼミの方々に感謝申し上げます。

渡辺 賢人

この度優秀賞という名誉な賞をいただき、大変光栄に思っております。今回、SPJに取り組むにあたって、チームで１つのものを作っていく難しさを学びました。このSPJで学んだことは、自分にとってプラスになることも多く、いい経験をさせていただきました。この経験を大切にして、今後につなげていきたいと思います。最後になりますが、今回の提言に協力していただいた関係者の方々、ゼミのメンバー、先生、そしてチームメンバーに感謝申し上げます。ありがとうございました。

Sport Policy for Japan 2016 優秀賞

神奈川大学
大竹ゼミチーム S

若い女性の
スポーツ実施率向上を目指して

受賞コメント

上杉 明日香

この度、優秀賞をいただくことができ、大変嬉しく思います。今回の大会に向けメンバーと意見をぶつけ合い、１つの政策提言を作っていくという事は初めてであり今後、自分自信を伸ばしていくための良い経験になりました。また他大学の方たちの発表は自分たちにはない視点ばかりでした。この大会での経験を今後に生かしていきたいと思います。最後に、今大会に関わる全ての方々、チームのメンバーに心より感謝を申し上げます。

斉藤 萌恵子

この度は、本大会において優秀賞を頂き大変嬉しく思っています。年々出場チームも増え、大会のレベルが上がる中、他大学の仲間と出会い、議論や交流をする経験を得て自分自身の視野や考え方が広がりました。最後までチームの仲間とたくさんの壁を乗り越えてきた仲間、熱心にご指導してくださった大竹先生、今宿先生、いい緊張感を常につくってくれたゼミ生全員に感謝を申し上げます。最後に今回の大会を参加するにあたって笹川スポーツ財団、幹事会の皆様をはじめとする Sports Policy for Japan に関わる全てに方々に心から感謝を申し上げます。

佐藤 涼菜

この度、優秀賞という賞を頂き、感謝と喜びの思いでいっぱいです。まず政策提言を作るにあたって、指導して下さった先生方や先輩方、アンケート調査に協力して下さった方々、そして一緒にここまで頑張った班員のみんなに感謝の気持ちを伝えたいです。あのような場でお話しさせて頂いた経験は私の自信に繋がると共に、今後の人生に生きる素晴らしいものでありました。本当にありがとうございました。

白田 亘輝

この度、本大会において優秀賞という素晴らしい賞を頂き、非常に嬉しく思います。ゼミの仲間と共に一つの問題に対し、真剣に向き合い、考えることで多くの方々と交流することができました。何より、素晴らしいチームのメンバーと共に過ごせたことが今後の人生の糧になり、財産になると思います。チームのみんな、指導してくださった大竹先生、今宿先生、笹川スポーツ財団様、審査員の皆様に深く感謝申し上げます。

高橋 航平

この度、Sport Policy for Japan 2016 において優秀賞を頂けたことを、非常に嬉しく思います。大会に向けゼミの仲間とおよそ半年という長い期間、一つのテーマに向かって様々な意見を交わし、議論を重ねてきました。大学生活の中でも密度の濃い有意義な時間でした。また、今大会に参加された他大学の発表を聴くことで、新たな視点、考え方を知ることができました。このような機会を下さった笹川スポーツ財団様、大会運営に携わった幹事会をはじめとする全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

結城 彩花

この度、優秀賞という素晴らしい賞を頂き、大変光栄に思っております。本大会に向け、約半年間チームの仲間と一つのことに全力で取り組み、苦労を重ねてきました。共に切磋琢磨してきたゼミの仲間や、お忙しい中ご指導してくださった大竹先生、今宿先生、たくさんの方々の協力があり、できたものだと思っております。また、本大会にご尽力してくださった笹川スポーツ財団の皆様はじめ、大会関係者の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

Sport Policy for Japan 2016 優秀賞

明治大学
高峰ゼミナール

ボールで遊べる公園づくり

受賞コメント

七山 諒太郎

今回優秀賞をいただき大変嬉しく思います。この賞については自分の力よりも仲間の力によるところが非常に多くありました。賞をいただいたときに改めて仲間への感謝の気持ちが生まれました。このプレゼンを通して普段はできないような調べ学習などを経験させていただき非常に貴重なものでした。また、参加者の皆様のプレゼンと非常に興味深いものばかりでした。SPJ に関わっている全てのみなさま、貴重な体験をありがとうございました。

岡本 みさと

この度は、優秀賞をいただくことができ、大変嬉しく思います。私は当日のプレゼンに参加する事が出来ないと前もって分かっていたので、準備段階において、出来る限りチームに貢献しなければいけないという思いが、他のメンバーより強かったように感じます。残念ながら、他チームのプレゼンを見たり、本番特有の空気を感じることは出来ませんでしたが、賞を取る程のプレゼンをしてくれたメンバーみんなの力に、少しでもなれていたら良いなと思っています。この経験を無駄にせず､社会に出ていく際に役立てていけるよう、日々努力して参ります。最後に、大会の開催に関与してくださった、全ての皆様に心からの感謝を申し上げます。

菊池 真緒子

今回は優秀賞という素晴らしい評価をいただけたことを、本当に嬉しく思っております。この課題で多くのことを学び、感じ、成長し、チームの仲間と更に絆を深め、とても充実した時間となりました。チームの仲間、指導してくださった先生、研究に協力していただいた方々、SPJ の運営幹事のみなさん、笹川スポーツ財団のみなさん、多くの方に感謝をいたします。ありがとうございました。今後も様々な課題に向けて日々進歩していきたいと思います。

後藤 滉平

この度、優秀賞を頂けたこと大変嬉しく思います。グループで１つのテーマに取り組むこと、大勢の前で自分の伝えたいことをしっかり伝えること、初めての体験ばかりで緊張と戸惑いの連続でした。しかしその成果としてこのような賞を頂けたことは私にとって大きな財産となりました｡今回様々な経験をさせて頂いて、その中で自分の力不足を多く感じました。この悔しさを忘れずに次に活かしていこうと思います。

立川 晶子

今回、Sport Policy for Japan 2016 において優秀賞をいただくことができ、大変嬉しいです。多くの人の前で発表したことや他大学の発表を聞くことができたことは貴重な経験になりました。この経験を今後に活かしていければ良いと感じました。

最後に、今回の発表のために共に尽力してきたゼミ生や指導してくださった高峰先生、運営に関わってくださった方々に感謝申し上げます。

Sport Policy for Japan 2016 優秀賞

桐蔭横浜大学
渋倉ゼミ A チーム

スポーツ推進委員の
効果的な活動方法を巡って

受賞コメント

中野渡 航輝

決勝プレゼン出場チームの発表時、私たちのチーム名が呼ばれた時の喜びは今も鮮明に覚えています。Sport Policy for Japan 2016 において 5 ヶ月間頑張ってきた研究が優秀賞という形として評価をいただけたこと、大変嬉しく思います。チームメンバー、指導教員の渋倉先生、審査員の方や機会を与えてくださった笹川スポーツ財団の皆様には本当に感謝しております。SPJ2016 で得られた経験、出会い、そして結果、全てに対して一生記憶に残る思い出と共にかけがえのない 5 ヶ月間となりました。本当にありがとうございました。

本村 彩花

私たちのゼミでは、Sports Policy for Japan に参加するのは初めてでした。右も左も分からないまま、手探り状態で研究を行い、大変だった事の方が多かったです。しかし、「スポーツで社会を良くしたい！」という気持ちを忘れず、諦めずに取り組んだ結果、優秀賞という素晴らしい賞を頂くことができ、大変嬉しく思っております。このような経験ができたのは、沢山の方々のお陰です。本当にありがとうございました。これからも「スポーツで社会を良くしたい！」という気持ちを忘れず、沢山のことに挑戦し、社会を良くしていきたいと思います。

遠藤　颯

この度、優秀賞をいただきとても嬉しく思います。研究を始める時に目標として決勝プレゼンに残ることを掲げていましたが、本当に残れるとは思いもしませんでした。チームメンバーを含めゼミ全体で一体となり活動できたことの賜物だと思います。ゼミ全体、また自分自身も今回の活動を終えて成長できたと思います。今回をきっかけに更に成長できるように大学生活を過ごしたいと思います。最後に、本大会に関わった全ての方に感謝を申し上げます。

永田 晴紀

この度、Sport Policy for Japan　2016 にて優秀賞という名誉ある賞を受賞できたことは、協力していただいた皆様なくしては決して届くことはなかったと思います。この場を借りて感謝申し上げます。自分自身大きな成長を感じる半年間でありました。この経験はかけがえのない大切なものになることでしょう。また、次世代の方々には一分一秒を無駄にせず、この Sport Policy for Japan という場をさらに成長させ、発展していくことを願っております。ありがとうございました。

吉原 直矢

今回優秀賞をいただき、自分自身驚くばかりです。きっと、班員が同じ問題意識を持ち、より良い社会にしていこうとする強い「想い」が、受賞へ導いたのだと思います。途中何度も挫けましたが、最後までやりきることができ、とても貴重な経験ができました。これら全て、班員の仲間、丁寧に指導してくださった渋倉先生、審査員の方々と笹川スポーツ財団の方々に最大の感謝を述べさせて頂きます。本当にありがとうございました。

Sport Policy for Japan 2016 優秀賞

立教大学
松尾ゼミ C グループ

「女性スポーツ」
改革プロジェクト

受賞コメント

朝倉 菜緒

本大会を通して、大変貴重な経験をさせていただきました。研究を進めていくにあたり困難も多くありましたが、とても充実した日々となりました。お忙しい中ご指導して下さった松尾先生をはじめ、アドバイスくださった院生や先輩方、切磋琢磨したゼミ生、そして当日まで共に悩み協力したチームの仲間のおかげでとれた賞であると感じております。また、ご尽力くださった笹川スポーツ財団様をはじめとする関係者の皆様に感謝申し上げます。

阿部 まどか

この様な賞を頂き、とても光栄です。発表の場に参加したことでプレゼンテーションなどを含め自分の成長にも繋がりました。政策を考えていく上で様々な障壁が出てきましたが、それが現代社会における運動、スポーツが抱える問題でもあると思います。この大会が学生の発信源の場となり、より良い運動・スポーツ環境づくりへの第一歩となればいいと思います。このような機会を頂きありがとう御座いました。

小川 貴世衣

SPJ において優秀賞という評価を頂き、大変嬉しく思います。SPJ に向けて仲間と行う研究や討論、また SPJ での他のチームの発表を聞くことは私にとって大変良い経験となりました。 5 月からの約半年間、この大会のために本気で取り組んできただけに、最優秀賞を取れなかったことに対して悔しさもあります。しかしこの気持ちを今後の活動の糧に頑張りたいと思います。 SPJ の開催に携わって下さった皆様方、本当にありがとうございました。

楠部 由莉

この度は優秀賞を受賞することができました。この発表を作り上げるまでに散々悩み苦しみましたが、このような形で成果が認められ、本当に嬉しく思います。女性スポーツについて研究を続けているうちに、日々の生活の中でもジェンダーを意識するようになりました。難しい問題ですが、この先、女子が気軽にスポーツに参加でき、男女が一緒にスポーツを楽しめるようになることを願っています。

並木 美百合

この度は優秀賞という賞を頂くことができたことを、とても嬉しく思います。SPJ 本番は留学中のため参加することが出来なかったのですが、SPJ に向けて準備していくなかでチームの皆んなと意見を出し合い、今まで自分に無かった考え方や視点を持つことが出来ました。SPJ で学んで貴重な体験を、これからの活動に活かしていきたいと思います。ありがとうございました！

宮﨑 亜美

約 5 か月間の取り組みを優秀賞という形で締めくくることができ、非常に嬉しく思います。ただ、最優秀賞を狙っていただけに悔いが残りますが。（笑）SPJ に向けて、チーム全員と協力し、他のゼミ生とは切磋琢磨しながらお互いを高め合ったこの経験は一生の宝物です。また、提言をまとめ、プレゼンをするという経験も今後に生かしたいと思います。このような機会を設けてくださったすべての人々に感謝しています。有難うございました。

Sport Policy for Japan 2016 特別賞

帝京大学 片上ゼミ

ブラインドサッカー集客数向上のための施策
～ダイバーシティ推進を目指して～

受賞コメント

この度 Sport Policy for Japan 2016 において特別賞という光栄な賞をいただき大変嬉しく思います。この賞は、片上先生のご指導、ゼミ生全員の協力がありいただけた賞です。自分自身人前で喋る機会が今までなく大変貴重な体験をさせていただきました。笹川スポーツ財団、幹事会をはじめとする大会関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

早稲田大学 間野研究室

アスリートの現役中における
キャリア形成支援に関する調査

受賞コメント

この度、審査員特別賞をいただくことができて大変嬉しく思います。間野先生をはじめとした、ゼミ生の皆様のご指導・ご協力のおかげでこの賞を受賞することが出来ました。今回の大会を通して我々の研究テーマである「アスリートの引退後のキャリア」という“スポーツの影の部分”について深く知ることが出来ました。評価されたポイントとして、私たちが突き詰めた「ロジックの正確さ」が評価されたのはしっかりとした事前準備の賜物だと思います。本当にありがとうございました。

札幌大学 東原ゼミ A 班

より公正なオリンピック・パラリンピック
招致プロセスの提案

受賞コメント

この度、特別賞を頂きまして大変光栄に思います。東原先生や上級生、調査に協力して頂いた札幌大学の学生、皆様のご指導・ご協力のおかげで受賞することができました。今回の SPJ を通して私たちは、仲間と協力し合い、励まし合い、多くのことを学ぶことが出来たと思います。いつか、この経験は必ず生きる時がやってくると思います。最後に、このような発表の機会を与えてくださった笹川スポーツ財団の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

Sport Policy for Japan 2016 特別賞

一橋大学 岡本ゼミ B チーム

Walrism
～歩く（walk）× 観光（tourism）～

受賞コメント

私たちが、“ワクワクを皆さんに届けたい”という思いで半年育ててきました「Walrism」がこのように評価されましたこと、大変うれしく思います。決勝には進めなかったものの、発表後に他大学の方からは「ワクワクした」という嬉しいお声をいただけて、私たちの目標は達成できたなと。そういう意味で Walrism は“特別”賞だと、誇らしく思っています。先生、先輩方には心から感謝しています。この半年間とても充実していました。今後も SPJ にはワクワクを評価する大会であってほしいなと思います。ありがとうございました。

大阪体育大学 冨山ゼミ B

ヲタスポ JAPAN

受賞コメント

本気で取り組んだ結果だと思います。
実際に調査に行くことで得られることは多くありました。
この行動力や独自性が評価されて本当に良かったです。
今後、この経験を生かして横にではなく、心身共に大きく成長していきます。

東北学院大学 スポーツマネジメント研究室

大規模噴火災害とスポーツ
―安全な登山活動を目指して

受賞コメント

この度、特別賞を頂きまして、大変光栄に思います。今回の研究・調査にあたり、天野先生のご指導はじめ、多くの仲間のサポートもあり、この賞を受賞することが出来ました。また、登山において経験も知識も浅はかな私たちのインタビュー調査にご協力して頂いた皆様、質問紙調査にご協力して頂いた皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。そして、このような機会を与えてくださった笹川スポーツ財団の皆様、幹事会の皆様には心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

受賞チーム要旨

全参加チームの要旨は、Sport Policy for Japan 2016 大会ウェブサイトでご覧いただけます。

最優秀賞

立教大学　松尾ゼミナール B 班
「特別支援学校におけるスポーツ活動の定着促進 ～スポーツを身近な存在へ～」 …… 23
プレゼンテーション資料 …… 27

優秀賞

一橋大学　岡本ゼミチーム A
「子どもの遊びに“冒険”を 」 …… 34
プレゼンテーション資料 …… 38

神奈川大学　大竹ゼミチーム S
「若い女性のスポーツ実施率向上を目指して」 …… 46
プレゼンテーション資料 …… 50

明治大学　高峰ゼミナール
「ボールで遊べる公園づくり」 …… 56
プレゼンテーション資料 …… 60

桐蔭横浜大学　渋倉ゼミ A チーム
「スポーツ推進委員の効果的な活動方法を巡って」 …… 65
プレゼンテーション資料 …… 69

立教大学　松尾ゼミ C グループ
「「女性スポーツ」改革プロジェクト」 …… 74
プレゼンテーション資料 …… 78

特別賞

帝京大学 片上ゼミ
「ブラインドサッカー集客数向上のための施策 ～ダイバーシティ推進を目指して～」 …… 84
プレゼンテーション資料 …… 88

早稲田大学 間野研究室
「アスリートの現役中におけるキャリア形成支援に関する調査」 …… 94
プレゼンテーション資料 …… 98

札幌大学　東原ゼミ A 班
「より公正なオリンピック・パラリンピック招致プロセスの提案」 …… 101
プレゼンテーション資料 …… 105

一橋大学 岡本ゼミ B チーム
「Walrism　～歩く（walk）× 観光（tourism）～」 …… 108
プレゼンテーション資料 …… 112

大阪体育大学　冨山ゼミ B
「ヲタスポ JAPAN」 …… 120
プレゼンテーション資料 …… 124

東北学院大学 スポーツマネジメント研究室
「大規模噴火災害とスポーツ ― 安全な登山活動を目指して ―」 …… 128
プレゼンテーション資料 …… 132

最優秀賞

特別支援学校におけるスポーツ活動の定着促進 ～スポーツを身近な存在へ～

立教大学　松尾ゼミナールＢ班

○ 丸茂　建太　　秋山　奈穂　　小檜山　匠
坂本　　航　　外岡里佳子　　中尾　彩夢

1. 緒言

スポーツ基本法には「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」（スポーツ基本法前文）とある。しかしながら、下の図１で示すように障害者がスポーツ・レクリエーションを週一回以上実施する割合は全体の約 18%に留まっており、障害者にとってスポーツは未だ身近な存在だとは言い難い。また田添が「パラリンピックのほとんどの公式競技は、脊髄損傷等による中途の肢体不自由障害者による競技が多いが、肢体不自由特別支援学校に多く在籍している児童生徒は先天的な障がいで、パラリンピックの公式競技に参加できる競技は少ない現状にあります」（田添，2015）と指摘しているように、障害者の中でも特に肢体不自由特別支援学校に通う生徒たちがスポーツに触れる機会は非常に限られている。そこで我々は障害者スポーツにおいて裾野の部分にあたる、肢体不自由特別支援学校における運動・スポーツの普及促進を目的とした支援策を提案する。

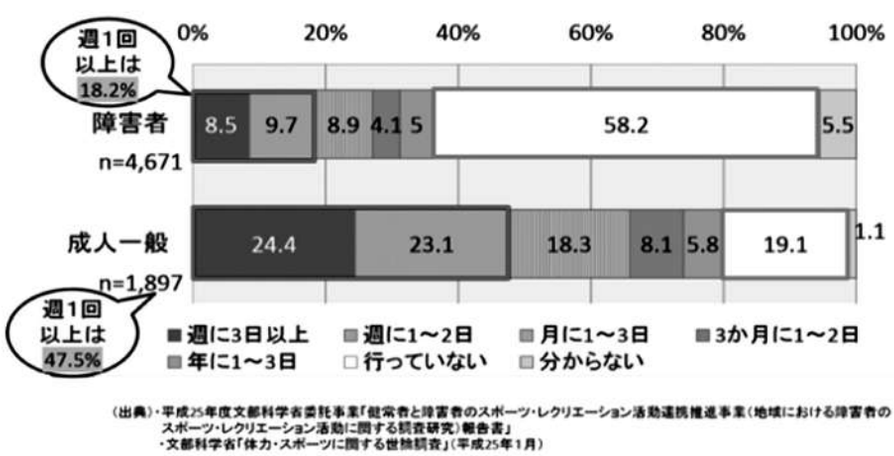


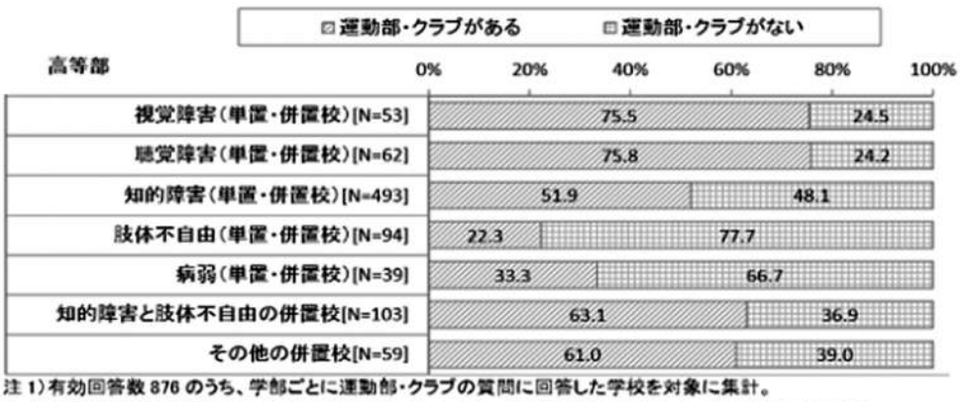
図１　過去１年間にスポーツ・レクリエーションを実施した日数（20 歳以上）

2. 研究の方法・結果及び考察

（1）特別支援学校における運動・スポーツの現状と課題

現在、全国にある特別支援学校の数は 1,096 校であり、在籍生徒数は 135,617 人にのぼる。その中で、最も在籍生徒数が多いのが知的障害となっており 121,544 人、続いて肢体不自由が 31,814 人、病弱が 19,955 人の児童生徒がそれぞれの学校に在籍している。現在の特別支援学校における運動部活動を始めとするスポーツ活動の現状について和は、「肢体不自由特別支援学校においては，重度運動障害のある児童生徒が多く在籍しているという実態から運動部活動・クラブ活動が実施されていないことや、これらが実施されている学校に

おいても実施種目は極めて限られている」（和，2015）としている。現在肢体不自由特別支援学校高等部において運動部・クラブを設置している学校は全体の 22,3％にとどまっており、視覚障害の 75.5％、知覚障害の 51.9％と比較すると極めて低い値となっていることからも、肢体不自由特別支援学校における運動・スポーツの困難さが推測できる（図２）。この理由について和らは「活動機会の少なさ情報の少なさ，障害の状況によって子ども達がスポーツを諦めてしまっている状況も予想される」（和ほか，2016）と示唆している。



注 1）有効回答数 876 のうち、学部ごとに運動部・クラブの質問に回答した学校を対象に集計。
注 2）視覚障害（単置・併置校）：単置校と併置校を合わせた、視覚障害の学校種における運動部・クラブの有無。他の障害種についても同様。
注 3）知的障害と肢体不自由の併置校：知的障害と肢体不自由合同の活動、障害種別に分かれての活動、及びいずれか一つの障害種での活動の有無。その他の併置校についても同様。

図２　運動部・クラブの有無（高等部・障害種別）

(2) 研究の方法・結果及び考察

ア．特別支援学校現地聞き取り調査概要

1. 訪問先及び対象：埼玉県立和光特別支援学校（肢体不自由），教員 A 氏・B 氏
2. 時期：2016 年 9 月 7 日（水）
3. 方法：半構造化インタビュー調査

イ．調査結果及び考察：得られた知見

1. 運動部活動を常設できない理由は、スクールバスの時間が決まってしまっていることによる時間的な制約があること、教員の通常業務の負担が大きく部活動をするには人員が不足していること
2. 家族や本人、先生が怪我などの懸念から運動に対して良い印象を持っておらず、運動部活動を始めとする運動・スポーツ活動の実施に対して消極的であること
3. 運動はおろか、日常生活さえ困難な生徒も多数在籍しているためすべての人にあったプログラムを作成することが困難であること

3. まとめ・提言

(1) まとめ（調査から得た知見に基づく提言のポイント）

我々は現地における先行研究およびインタビュー調査から、支援策を提言する上で障壁となる以下の３つの要素を解決する事が重要だと考えた。①家族や先生を始めとする他者の運動・スポーツに対する協力が不足していること。②澤江が『また中学段階までは普通学校で過ごし、高等学校段階で特別支援学校に入学し

た肢体不自由のある生徒は、体育は「見学する」場所であって「運動する」場所ではないと認識していた』（澤江, 2015）と指摘しているようにスポーツや運動に触れる体験が少ないために、運動に対してネガティブなイメージを持ってしまっていること。③体育の授業時間が週に１時間であることに加え、多くの生徒が利用するスクールバスの時間が決まっているがゆえに時間的制約があること。

図３　障壁となる三要素

（2）提言

具体的な支援策：「はじめの IPPO プロジェクト」（図４）

ア．支援策の内容

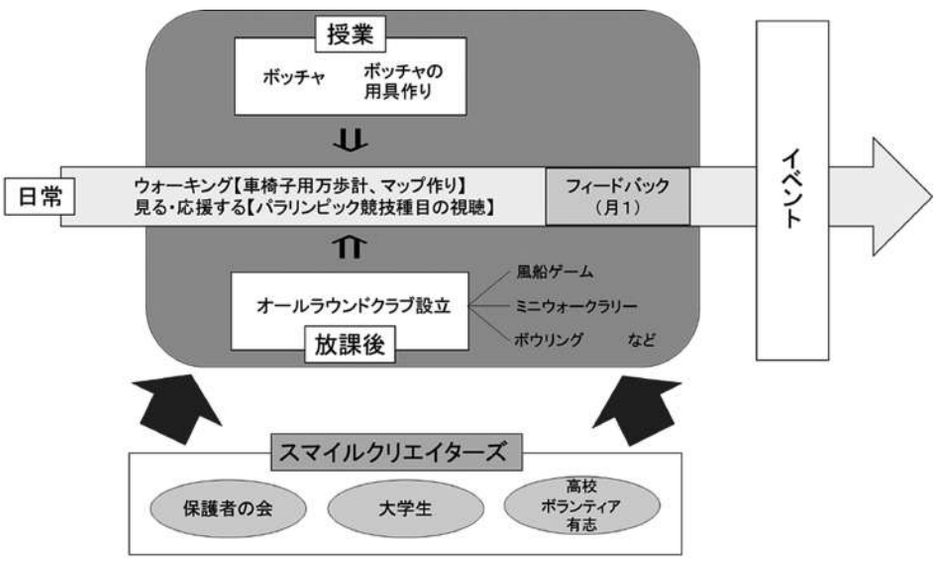


図４　支援策の図

①日常的運動

「するスポーツ」だけでなく「見るスポーツ」「応援するスポーツ」のスポーツ三要素を取り入れ、2020 年東京パラリンピック競技種目 22 競技を中心に競技 VTR などを放送し、スポーツに触れる機会を作る。「するスポーツ」においては、はじめはウォーキングを中心に行う。通学時間を活用し、万歩計を用いてウォークラリー形式にするなどの工夫をこらす。また、車椅子の人も楽しめるよう車椅子用万歩計も用意する。自宅周辺のマップを配布し、通学の中で気づいた地域の発見を記したオリジナル地域マップを作り、定期的にフィードバックを行い確認する。これらを定期的に行い運動の楽しさを知ることで、運動へのネガティブな印象を取り除く。

②授業「自立活動」の活用

自立活動の授業時間内にボッチャを実施する。自立活動とは特別支援学校に設けられている授業プログラムである。特別支援学校指導要領によると「健康の保持・心理的安定・環境把握・身体の動き・コミュニケーション・人間関係の形成」が目的とされており、障害レベルに関係なく行えるボッチャはプログラムの目的に適合していると考えられる。ボッチャに使う用具は費用削減、競技への愛着心促進、コミュニケーション能力向上などのため教員・ボランティアと協力し生徒ら自身で作成する。

③オールラウンドクラブの設立

放課後の時間にオールラウンドクラブを作り、いくつか用意された種目の中から生徒自身が選択して実施する。強制ではなく自分の意思でできるため、気楽に取り組むことができ、これを日常的に行うことで運動習慣が身につく。保護者や大学生などの協力を得てクラブを運営する。

④スマイルスポーツイベントの開催

夏休み・冬休みなどの長期休暇を利用しスポーツイベントを開催する。開催種目としては日常的に行なってきた運動や放課後のクラブ活動内容を基盤とする。今までの成果を発揮できる場、及び保護者をはじめとする重要なる他者への発表の場を設けることで、日々のモチベーションを高め更なる運動への意欲の向上を図る。

イ．運営体制

オールラウンドクラブを支えるのは図５に示した通り、各組織（大学生、保護者の会、スポーツ推進委員、特別支援学校教員、高校生）の代表者の集まりである「事務局」が基盤となり、活動に直接参加しサポートする大学生、教員、高校生ボランティア有志によって成る「実行委員会」を中心とする。そして、安全確保や活動全般のサポートを保護者の会とスポーツ推進委員に依頼する。このクラブを支える各組織のまとまりを総称として「スマイルクリエイターズ」と名付ける。

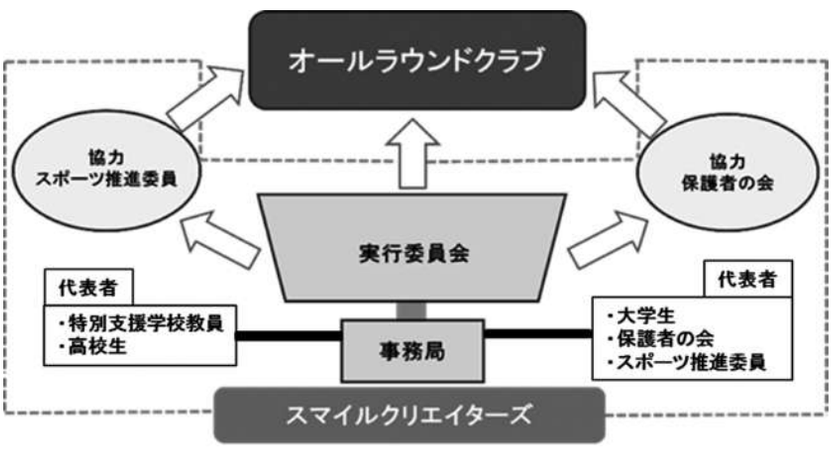


図５　運営体制の図

ウ．期待される効果

① 継続的な運動習慣の定着により運動そのものにもプラスなイメージを与えること。
② 競技をみることによって、2020 年東京パラリンピックへの興味関心が高まること。
③ スポーツから得た自信は日常生活にも好影響を与え意欲的な行動のきっかけになること。
④ 地域に根付いた活動から運動の楽しさだけでなく、社会との壁を払拭し地域との密着が図れること。

＜参考文献＞

・澤江幸則（2015）　障害のある子どもたちと障害のない子どもたちの協働活動の現状と課題、日本アダプテッド体育・スポーツ学会企画、p.4
・田添敦孝（2015）　特別支援学校における 2020 年パラリンピックへの新たな取り組みについて（特別支援学校紹介）、『アダプテッド・スポーツ科学 2015』、p.53
・和史朗（2015）　肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒を対象としたベースボール型競技の資料、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第 6 号 p.51

特別支援学校におけるスポーツ活動の定着促進
～スポーツを身近な存在へ～

立教大学　松尾ゼミナール　B班
○丸茂 建太　秋山 奈穂　小檜山 匠　坂本 航　外岡 里佳子　中尾 彩夢

1

緒言

障害者のスポーツ実施状況

**「スポーツを通じて
幸福で豊かな生活を営むことは、
全ての人々の権利」
(スポーツ基本法前文)**

2

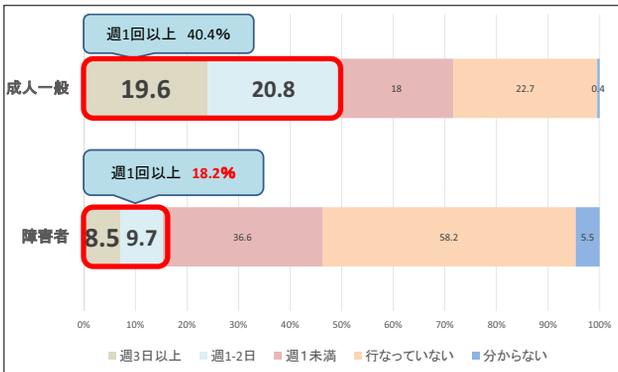


図1 過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数(20歳以上)

出典:平成25年度文部科学省委託事業「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者の スポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）報告書」・内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(附帯:テロ対策に関する世論調査)」(平成27年6月)

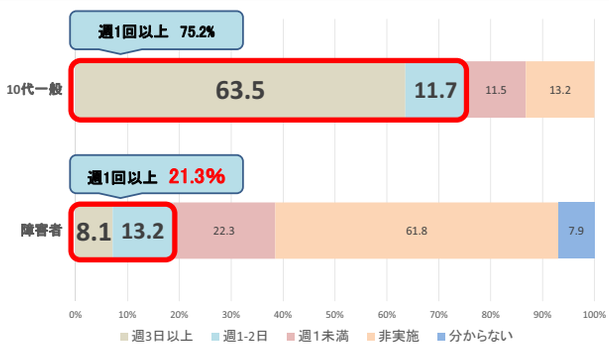


図2 10代の過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った日数

出典:平成27年度 スポーツ庁『地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)』報告書
笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」(2012)
出典:笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」(2015)

4

緒言

障害者のスポーツ実施状況

**「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、
全ての人々の権利」
(スポーツ基本法前文)**

健常者に比べて継続的にスポーツを行っている障害者は少ない

**特に学生時代の障害者にとって
スポーツは身近な存在とは言い難い！**

5

緒言

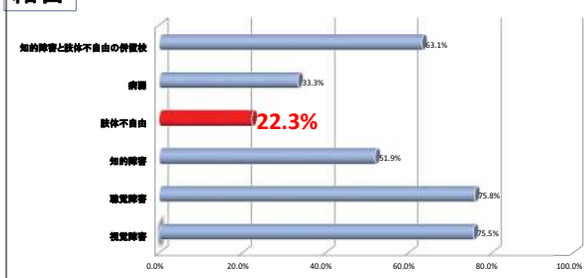


図3 特別支援学校高等部における運動部・クラブの有無（障害種別）

出典:文部科学省『特別支援学校のスポーツ環境に関する調査』(2014)

**障害者の中でも肢体不自由の
スポーツの機会が制限されている**

6

緒言

**肢体不自由特別支援学校における
運動・スポーツの普及促進
を目的とした支援策**

7

現状と課題

特別支援学校の現状

表1 特別支援学校の学校数・幼児児童生徒数

	学校数	幼児児童生徒数
視覚	65	3,012
聴覚	88	5,932
知覚	514	76,410
肢体	130	11,666
病弱	63	2,472
総計	1,096	135,617

出典:平成２６年度文部科学省『特別支援教育について』

8

現状と課題

肢体不自由教育について

・肢体不自由とは「身体の動きに関する器官が、病気やけがで損なわれ、歩行や筆記などの日常生活動作が困難な状態」とされている。（文部科学省　特別支援教育について）

・「特別支援学校（肢体不自由）においては、…〈中略〉…中学校又は高等学校に準ずる教育を行うとともに、特別活動及び自立活動によって編成されています。」（国立特別支援教育総合研究所）と示されており、各自にあったカリキュラムが編成されている。

9

現状と課題

障害の重度・重複化について

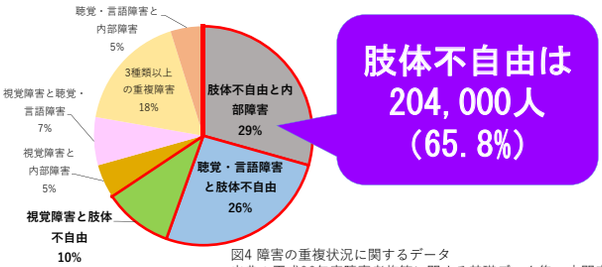


図4 障害の重複状況に関するデータ
出典：平成26年度障害者施策に関する基礎データ集 - 内閣府

2015年の調査から、肢体不自由特別支援学校では57.2%の生徒が重複障害学級に在籍している。その中には、日常的活動も困難な生徒も少なくなく、医療的ケアを必要とする子どもも多く在籍している。

10

現状と課題

肢体不自由特別支援学校における運動・スポーツについて

・肢体不自由特別支援学校におけるスポーツについて和は「比較的軽い障害のある生徒が通う学校においてはバスケットボールやサッカーなどのクラブ活動の取り組み等が見られるものの、比較的重い障害のある児童生徒も通う特別支援学校における取り組みは限定的である」（和, 2011）と指摘している。

11

現状と課題

スポーツ参加によって得られた成果

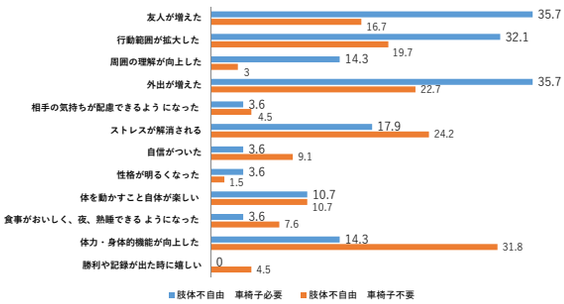


図5 スポーツ・レクリエーションをやってよかったこと
出典:笹川スポーツ財団 『地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）』

12

現状と課題

スポーツに対する意識調査

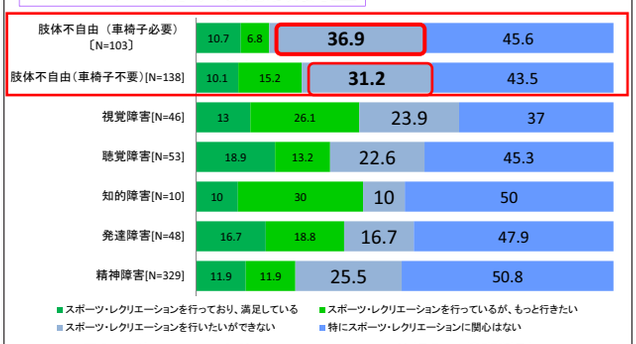


図6 スポーツ・レクリエーションへの取り組み（障害種別）
出典:笹川スポーツ財団 『地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）』

13

現状と課題

特別支援学校における運動・スポーツの課題

肢体不自由特別支援学校に通う生徒らの運動・スポーツへの取り組みは少ない

↓

環境的要因が障害となり、運動・スポーツに取り組む‘機会’が非常に限られているのではないか？

14

現地調査

特別支援学校現地聞き取り調査

○調査概要

訪問先：埼玉県立A特別支援学校（肢体不自由）
対象：教員A氏・B氏
時期：2016年9月7日（水）
方法：半構造化インタビュー調査

15

現地調査

得られた知見
～運動・スポーツをめぐる現状と課題～

- 運動をする時間は体育の週1回のみ
- 運動部活動は設置されていない
- 年数回ある大会に任意で出場

例）彩の国ふれあいピック（ボッチャ、陸上など）

- 大会前に放課後、練習を行っている程度である
- スポーツ活動に消極的
- 家族の参加意識が弱い

16

現地調査

得られた知見
～運動部を常設する上での問題点～

17

まとめ

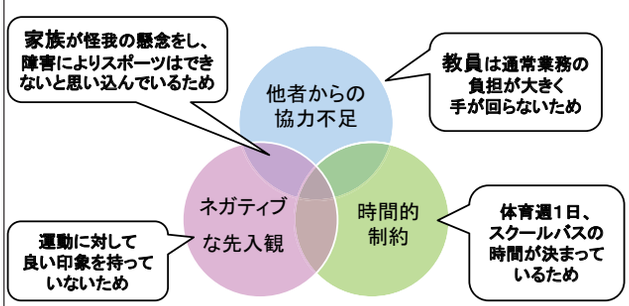
先行研究より

•肢体不自由特別支援学校において運動部活動が実施されない現状について和らは、「**活動機会の少なさ情報の少なさ，障害の状況によって子ども達がスポーツを諦めてしまっている**状況も予想される」（和ほか, 2016）と示唆している。

18

まとめ

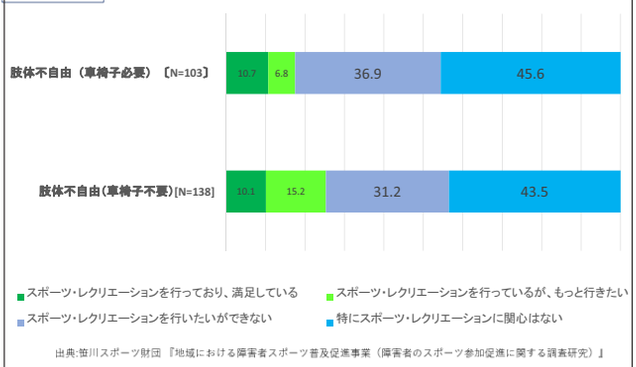
提言のポイント



障壁となる三要素

19

まとめ



出典:笹川スポーツ財団 『地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）』

図7　スポーツレクリエーションへの取り組み（障害種別）

20

まとめ

運動・スポーツをする
機会の増加を目的とした
プログラムを提案

21

支援策

はじめのIPPOプロジェクト

22

支援策

中心となる4つの活動

1.日常的運動プログラム
2.授業プログラム「自立活動」の活用
3.オールラウンドクラブの設立
4.スマイルスポーツイベントの開催

23

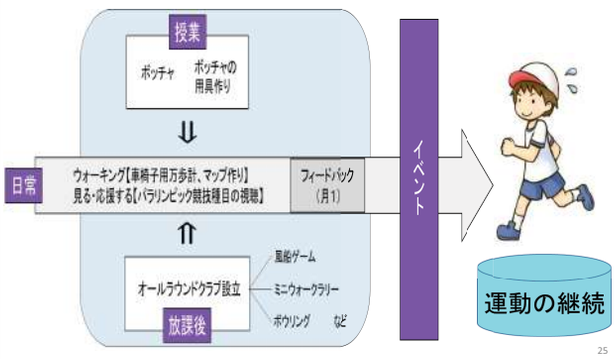
支援策

支援策を構成する上で大切にしたいスポーツの3要素

スポーツ
- する
- みる
- 応援する

24

はじめのIPPOプロジェクト全体図



25

支援策

みる ⇔ 応援する

・2020年東京パラリンピック競技22種目の競技VTRや試合映像を休み時間やお昼時間などにTVで放映する

・パソコンやスマートフォンでもみられるようにし、いつでも競技に触れられる環境を整える。

・スマートフォンのアプリなども活用し、より日常にスポーツを密着させる。

➡ パラリンピック競技種目22競技に「目」でみて触れる機会を！

26

指導方法

◎みるスポーツ

・指導員：教員
・サポート：保護者
〈目的〉
・どのような障害者スポーツがあるのかを教え、興味を持ってもらう
・スポーツの魅力・楽しさを知ってもらう
〈指導内容〉
・障害者スポーツを見せる
〈指導方法〉
・動画サイトにあげられているパラリンピックの動画を見せる
・ただ見せるだけでなく、ルールや何が見どころなのかを伝える

27

支援策

する

ウォーキングをしよう！

・住んでいる地域について自分で歩いて知る
・万歩計、車いす万歩計（距離計）を用いて成果を目で確認
・自宅周辺のマップを配布し、歩きながら気づいた地域の特徴を記したオリジナルマップを作成
・定期的なフィードバックによるコミュニケーション

28

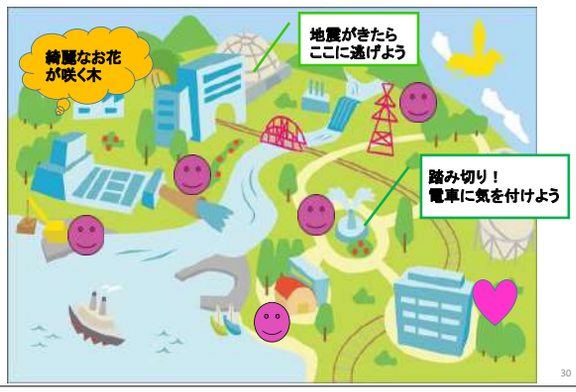
指導方法

◎ウォーキング

・指導員：教員
・サポート：保護者
〈目的〉
スポーツに取り組む第一歩として自信をつけてもらう
〈指導内容〉
・万歩計の使い方
・地域マップについての説明
・安全に気を付けること
〈指導方法〉
・ホームルームで行う
・具体的な完成例を見せ、地域マップのイメージをつかませる。
・保護者に協力を求める

29

オリジナルマップの作成



30

授業「自立活動」の活用

・「自立活動」とは特別支援学校に設けられた授業カリキュラムの一つであり、以下の6項目を授業の目的としている。

体の動き	心理的安定	環境把握
健康の保持	コミュニケーション能力の向上	人間関係の形成

31

支援策

ボッチャについて

障害レベル関係なく行える
それぞれのレベルに合わせてスキルアップできる

・ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目である。
・ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競う。

32

指導方法

◎ボッチャ

・指導員：教員（障がいスポーツ指導員）
〈目的〉
・自立活動の一貫として行い、ボッチャを通じ様々な人とのコミュニケーションを図る
〈指導内容〉
・ボッチャのルール説明
・ボッチャの投げ方、蹴り方、ランプの使い方
・用具の作り方
〈指導方法〉
・用具づくりを教員、ボランティアで協力して教える
・障害のタイプ別に分かれ、手が使える生徒には投げ方を、足を使う生徒には蹴り方を、両方使えない場合はランプの使い方をそれぞれに分かれて教える。
・簡単なルール説明の後、タイプ別に分かれている生徒たちを均等にグループ分けし試合を行う

33

支援策

オールラウンドクラブの設立

・放課後をメインに活動
・種目は生徒自身で選択できる
・参加する日にちも選択可能

クラブ種目の例

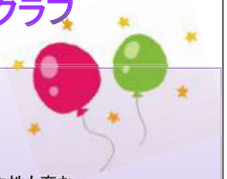
・風船バレーボール
・ボッチャトーナメント
・らくがきウォーク
・ぞうさんオセロ
・シーソー玉入れ
・宝探しウォーキング
・お引越しリレー
など

世界ゆるスポーツ協会　参照
http://yurusports.com/

34

指導方法

◎オールラウンドクラブ



・指導員：教員
・サポート：実行委員
〈目的〉
・運動習慣を身に付ける
・各々の好きな種目を選択して実施することにより、自主性も育む
〈指導内容〉
・実施するスポーツのルール説明
・練習と実践を行う
〈指導方法〉
・放課後が始まると同時に説明を、口頭と実践して見せることで教える
・楽しみながら実施することを念頭に置き、教員もボランティアも声掛けをしていく

35

スマイルスポーツイベントの開催

・夏休み、冬休みなどの長期休暇でイベントを開催

・普段行うウォーキングやオールラウンドクラブでの活動を基盤とする

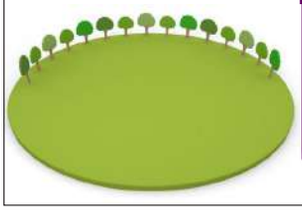
・一般の人も一緒にできる参加プログラムの用意

・大学のキャンパス、公園などを使用

36

第1回スマイルスポーツイベント

日時：2017年8月8日（火）
スマイルの日
場所：A大学Bキャンパス
・総合Aグランド
・体育館Bアリーナ
・体育館Cアリーナ
時間：10時開会式～16時閉会式



タイムスケジュール

10：00	開会式
10：15	とびきりの笑顔で！ Hiチーズ選手権
10：30	風船バレー
11：30	宝島ウォークラリー（一般参加）
12：00	お昼休憩
13：30	ぞうさんオセロ
14：30	ボッチャ大会
16：00	閉会式・表彰

37

指導方法

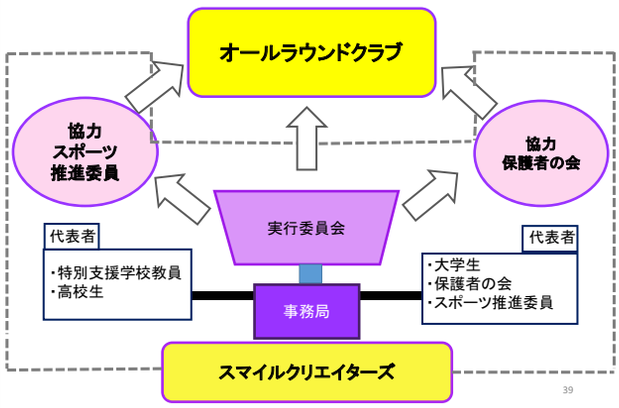
◎スマイルスポーツイベント

・指導員：スポーツ推進委員
・サポート：事務局、実行委員、保護者の会
〈目的〉
・これまでの成果を発揮する場、保護者などの重要なる他者への発表の場を設けることでモチベーションアップ
・障害のあるなしに関わらずみんなでスポーツを楽しむ
〈指導内容〉
・開催種目のルール説明
・安全面の注意
・楽しむこととこれまでの活動を発揮すること
〈指導方法〉
・イベント当日開始前に集合時にルールの説明
・イベントの終了後に生徒やボランティアなどみんなで振り返りをする

38

運営体制

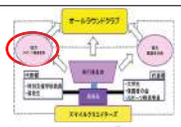
運営体制図



39

運営体制

スポーツ推進委員



そもそも
「スポーツ推進委員」
とは？

・スポーツの実技の指導
・その他スポーツに関する指導・助言
・スポーツ推進のための事業の実施に係る連絡調整

今回の
役割

・実行委員会の研修を担当
・事務局に所属し、日程調整やプログラムのアドバイスをする
・イベント当日にサポーターとして参加

40